

生物から見た大阪の自然 2008—指標生物調査報告—

昨年6月に「生物」の授業を通して、自宅周辺の生き物を調べようと呼びかけた指標生物調査の結果の概要がまとまりましたので報告します。この調査は1988年(20年前)から、1994年・1998年・2003年とほぼ5年毎に行っているため、以前の結果と比較すると、20年間で大阪の生物の分布がどのように変わったかがよくわかります。今回の調査には、下記の25高校・5293人の皆さんに協力をいただきました。ありがとうございました。

調査参加校一覧： 四条畷・泉鳥取・同志社香里・豊中・香里丘・大手前・布施・住吉・山田・大阪教育大池田・泉北・狭山・長尾・牧野・芥川・西寝屋川・豊島・大阪国際大大和田・信太・東寝屋川・高津・福井・堺西・生野・日根野
以上25校

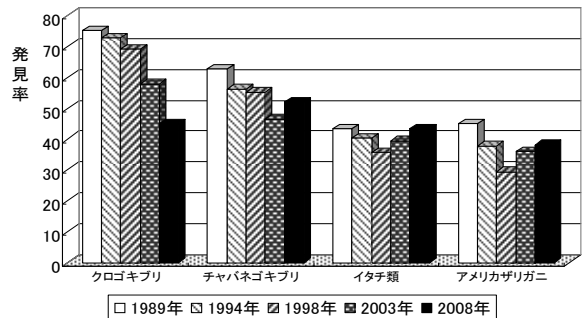
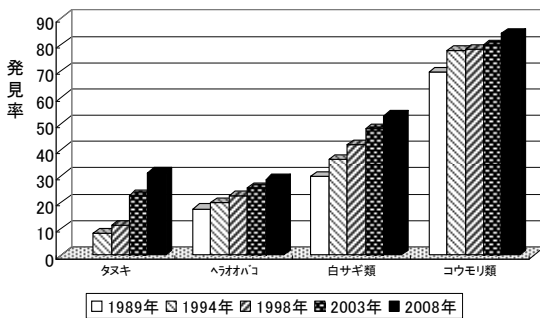
1 大阪における主な指標生物の分布状況(裏面のカラー地図参照)

今回調査した動植物の分布状況を地図にまとめてみると、大きく次の4つのタイプに分けることができる。

- ① 都心部や市街地には少なく、自然が豊かな郊外の丘陵地や山間部に行くほど発見率が増加する種類。これらの生物は良好な自然が残されている環境の指標となる。(例、ヘビ類・白いサギ類・タヌキ・ホタル類・イモリ)。
- ② 餌の少ない都心部には少ないが、人が生活するために捕食者が近づきにくい人家周辺や農耕地などで増加し、捕食者の多い山間部では再び少なくなる。(例、コウモリ類・ツバメ類・アメリカザリガニ・ウシガエル)
- ③ 郊外よりもむしろ都市部に多く見られる生物。人家周辺で生息したり、人の活動で作られる裸地に生育するなど人間の生活と密接に関係している都市型生物。(イタチ類・クロゴキブリ・チャバネゴキブリ・オオバコ類)
- ④ ほぼ大阪府全域で多く発見され、郊外でも市街地でもたくましく生きていける動物(例、スズメ・カラス類)

2 20年前と比べて増加した生物・減少した生物

それぞれの生物を調査した人のうち、何%の人がその生物を発見したかという「発見率」が、第1回調査(1988年)から今回までどのように変化してきたかを比較すると、大阪府内でこの20年間で増加した生物と、減少した生物とがあることがわかる。コウモリ類・白いサギ類・タヌキはずっと増加を続けている。また、外来種のヘラオオバコは増加しているが、日本在来種のオオバコは減少傾向にある。それに対して、ゴキブリ類、中でもクロゴキブリは著しく減少し、この20年間でチャバネゴキブリより少なくなってしまう。また、イタチ類とアメリカザリガニは1998年までは減少したが、その後、再び増加して調査開始当初の発見率を回復した。



3 大阪の高校生の自然観

今回の調査では高校生が自然に関してどう考えているかについても答えてもらった。「今後大阪の自然をどうすべきか」という問いに対しては、「もっと多くの自然が必要」という回答が20年前の53%から今回は33%まで減少した。また、ヘビ・カエル・昆虫に素手で触れるかという問いに対しては、ヘビに触れる生徒は5人に1人くらいであまり変わっていないが、昆虫やカエルに触れる生徒が減少し、特に高校生になって昆虫に触れる人の割合が70%から43%まで減少した。

